

母親の内的ワーキングモデルと虐待的な養育態度の関連性

ウラヤマ アキミ ニシムラ マミ コ
浦山 晶美* 西村真実子^{2*}

目的 わが子を虐待する母親の要因には愛着関係の障害が一因であるとの見方が一般的になってきた。愛着型にはそれぞれ個人差があり、その人のこれまで経験した関係の質に応じて自己と他者に関する内的ワーキングモデル (Internal Working Model : IWM と略す) が形成される。そこで本研究は虐待防止策の方向性を考えるため、養育歴を反映する IWM と虐待的な養育態度および、サポートとの関連性を明らかにすることを研究目的とした。

方法 石川県内の1歳6か月児健診と3歳児健診に訪れている母親534人に直接質問紙票を手渡し、調査は無記名とし回収は郵送で行った。

結果 IWM の両価性が高い母親ほど、他の IWM 型の母親よりも虐待的な養育態度が多くみられ、育児サポートが得られていてもその傾向は変わらなかった。一方、IWM の安定性が低い母親ほど他の IWM 型の母親よりも虐待的な養育態度の重複が多くみられたが、サポートを受けている場合には虐待的な養育態度は減少する傾向がみられた。

結論 IWM は虐待的な養育態度と関連性があると言え、また安定性が低い母親には育児サポートが虐待的な養育態度の発生を緩和する働きがあることが示唆された。

Key words : Support. Internal Working Model. Tendency toward child abuse

1 緒 言

虐待の原因は多くの要因が絡みあって発生するが、その中でも親自身の被養育体験が重要な要因として考えられ、虐待が次世代に伝達されるのは精神病理ではなく愛着の質であるとの見方が一般的になってきた^{1~5)}。愛着理論は J. Bowlby⁶⁾ が提唱したもので、愛着とは、重要な他者に対する接触、接近や社会的な相互作用をもとに、安心感を得る欲求である。乳幼児は本能的に母親 (養育者) を求め、その乳首を吸ったり、微笑んだり、しがみついたり、後追いしたりすると母親が応じるという累積的な経験により、母子間に特別な愛情の絆が形成され、乳幼児はこの絆を安全基地として、外界の環境や人とのやり取りの仕方を学んでいく。このように親子間の相互交流の反復により、子どもの心のなかに「内的ワーキングモデル (Internal working model : IWM と略す)」という内的表象 (イメージ) が育っていく。IWM とは、乳幼児が学習過程で発達させていく内的表象で、遭遇する出来事をどのように評価、解釈し、どのように未来を予測して、それに対して

自分がどのように行動を計画していけばよいかを導く機能を持つ。親との間に安定した愛着関係を形成した子どもは、自分を愛してくれる親、そして養護されるに値する自分という IWM をもつ。一方、不安定な愛着関係を形成した子どもは、愛してくれず応答的でない親、そして養護されるに値しない自分という IWM をもつ。IWM は 2, 3 歳頃までに形成され、それはその後の対人関係への期待の原型となり、生涯を通じて比較的变化することなく持続する傾向があると言われている。そして親から虐待や拒絶を受けた子どもは愛着体験が歪み不安定な IWM をもつため、それが修正されないまま親になった場合、子どもに対して拒絶的な行動をとる可能性が高くなると考えられ、不適切な養育態度は IWM を介して次世代に受け継がれると考えられている^{7~9)}。

Hazan と Shaver¹⁰⁾ は、IWM の型が生涯を通じて持続する傾向があることに着目し、実験的研究から IWM を安定型と不安定型に分け、そのうち不安定型は愛着行動のパターンによって両価型と回避型に分類し、成人の IWM の 3 者択一の質問紙尺度を作成した。しかし、一つのタイプが完全に当てはまることは稀で、一人の人間の中にはそれぞれの特徴が同時に存在しているという観点から、詫摩と戸田¹¹⁾ らは、18項目の質問から構成された IWM 尺度を開発した。戸田らが開発した尺度の信頼性と妥当性は

* 石川県立看護大学大学院博士後期課程地域看護学

^{2*} 石川県立看護大学

連絡先：〒292-1212 石川県河北市高松町中沼ツ 7-1
石川県立看護大学看護学研究科 浦山晶美

検証されており、簡便に使用できることから本研究ではこの尺度を用いて、不安定な IWM をもつ母親は安定な IWM を持つ母親に比べて子どもと虐待的な養育関係に陥るものが多いという仮説を立て、「母親の IWM と虐待的な養育態度」および、育児サポートとの関連性を明らかにすることを研究目的とした。それらを明らかにすることによって虐待を未然に防止できるための手がかりが得られると考えられる。

II 研究方法

1. 対象者

石川県 K 市内の健康センターで開催されている1歳6か月児健診と3歳児健診に訪れている母親534人に質問紙票を直接手渡し、父親や祖父母が連れている場合は配布しなかった。

2. 倫理的配慮

石川県立看護大学の倫理審査会の承認を得た後、K市の3箇所の健康センター長の書面による同意を得た。健診に訪れている母親一人ひとりに研究の目的と、調査に協力しなくても一切不利益が生じないことを口頭と紙面上で説明した。調査は無記名とし回収は郵送で行ない、会場内での記入を希望した母親には記入場所を設置して記入後封をしてから回収箱に入れてもらった。

3. 調査方法

質問紙票は、母親の愛着型を測定するのに戸田¹¹⁾らが開発した IWM 尺度を用いた。IWM 尺度は安定型と不安定型に分けられ、不安定型はさらに両価型と回避型に分類され、安定型・両価型・回避型の3つの下位尺度から構成されている。各下位尺度は6つの質問項目で、全部で18項目あり、3因子解(安定型・両価型・回避型)での因子分析を行い、各因子得点をもって尺度得点とする。虐待的な養育態度は、内山¹²⁾らが虐待行為の実態を調査するために作成した質問項目の中から、児の年齢に不適切なものや母親が明らかに不快を感じさせるような項目を除いて9項目を選出した。その他、虐待不安の内容を聞く2つの項目を追加した。全質問は11項目で、回答は4件法で「ない」、「たまにある」、「時々ある」、「よくある」である。質問の内容は身体的暴力に関するものは、頭をたたく・顔を平手打ちする・ひどくつねる・物を使って叩く、等である。ネグレクトに関するものは、風呂に入れたり下着を替えたりしない・自動車内に放置する、等であり、心理的なものは、ひどく感情的になって八つ当たりする・傷つけるような暴言を言う、等である。虐待不安に関するものは、たたいてしまいそうで怖い・何

をするかわからない、の2つの項目で、これらは行為を実行している表現ではないが、虐待不安を抱く気持ちだが、子どもと接するとき無意識に冷たい態度や、無視した行動をとっていることが多いとの報告により加えた¹³⁾。調査票記載時には、健診に連れてきた子どものことを想定して記入して頂いた。背景因子として、家族形態・年齢・就業状況・子どもの数、児の特別な障害(先天性の異常、分娩外傷、発達障害)・双子の有無・妊娠を希望していたかどうか、育児や家事を手伝ってくれる存在の有無についてである。調査期間は2005年の7月から9月に実施した。

4. 分析方法

統計ソフト SPSS13.0J を用いて、IWM 尺度の因子分析を行い、愛着理論から演繹される3因子(安定型、両価型、回避型)が本研究対象者からも抽出されるかを含んだ信頼性と妥当性を確認した。各 IWM 型と虐待的な養育関係との関係性をクロス表分析(χ^2 検定)で統計解析を行い有意水準は5%未満を採用した。次に、 χ^2 検定で有意差が確認された後どこに差があるかを確認するために残差分析を行った。育児サポートとの関連については、対象者をサポートの「ある群」と「ない群」とに分類して、虐待的な養育態度と各 IWM 型間の比較検討を行った。

III 結果

調査票を配布した母親は534人、回収率は383人(回収率71.7%)で、そのうち有効回答は364件(68.2%)であった。母親の「虐待的な養育態度」を調査するとき、4件法で行ったが「時々ある」、「よくある」という回答が少なかった。そのため回収された回答を「ない」を「いいえ」とし、「たまにある」、「時々ある」、「よくある」を「はい」として、2段階に分類し直した。これから述べる結果は、2段階の回答分類で導き出されたものである。

1. 背景因子と養育態度

対象者の平均年齢は31.8歳で標準偏差は4.5歳であった。特別な障害(先天性の異常、分娩外傷、発達障害)を持つ児の母親はいなかった。母親一人当たり平均1.7人の子どもを持ち、双子を持つ母親は5人(1.4%)だったが分析から除外しなかった。家族形態は全体の80%以上が核家族であり、全体の62.2%の母親が専業主婦であった。育児や家事を手伝ってくれる人がいると答えた母親は84.3%であった(表1)。虐待的養育態度11項目のなかで、全対象者では「ある」と答えた項目が多かったのは、感情的八つ当たりで75.8%、次に頭をたたくが

表1 対象者の背景因子 n=364

調査項目	全体
母の年齢 (歳)	31.8±4.5
家族形態	核家族 292(80.3)
	複合家族 72(19.7)
母の就業	パート 57(15.6)
	常勤 81(22.2)
子どもの数	1人 142(39.0)
	2人 164(45.0)
	3人以上 58(16.0)
妊娠形態	単体 355(97.8)
	多胎(双子) 5(1.4)
妊娠希望	無回答 4(0.8)
	していた 331(91.0)
	どちらでもない 6(1.6)
	していない 23(6.3)
児の特別な障害	無回答 4(1.1)
	ある 0(0)
家事・育児を手伝ってくれる人の存在	ない 364(100)
	いる 307(84.3)
	無回答 19(5.2)
	ない 38(10.4)

表2 虐待的な養育態度の頻度 (%)

		健診別		
		全体 n=364	1歳 6か月児 n=156	3歳児 n=208
感情的な八つ当たり	ない	88(24.2)	51(32.7)	37(17.8)
	ある	276(75.8)	105(67.3)	171(82.2)
傷つける暴言を言う	ない	205(56.3)	107(68.6)	98(47.1)
	ある	159(43.7)	49(31.4)	110(52.9)
頭をたたく	ない	162(44.5)	81(51.9)	81(38.9)
	ある	202(55.5)	75(48.1)	127(61.1)
顔を平手うちする	ない	281(77.2)	127(81.4)	154(74.0)
	ある	83(22.2)	29(18.6)	54(26.0)
ひどくつねる	ない	337(92.6)	147(94.2)	190(91.3)
	ある	27(7.4)	9(5.8)	18(8.7)
物を使って叩く	ない	342(94.0)	148(94.9)	194(93.3)
	ある	22(6.0)	8(5.1)	14(6.7)
物を投げつける	ない	314(86.3)	136(87.2)	178(85.6)
	ある	50(13.7)	20(12.8)	30(14.4)
あまり風呂に入れない	ない	362(99.5)	155(99.4)	207(99.5)
	ある	2(0.5)	1(0.6)	1(0.5)
自動車内に放置する	ない	326(89.6)	135(86.5)	191(91.8)
	ある	38(10.4)	21(13.5)	17(8.2)
たたいてしまいがちで怖い	ない	215(59.1)	93(59.6)	122(58.7)
	ある	149(40.9)	63(40.4)	86(41.3)
何をするか分からない	ない	320(87.9)	137(87.8)	183(88.0)
	ある	44(12.1)	19(12.2)	25(12.0)

55.5%, 傷つける暴言をはくが43.7%で, これらの項目は健診別でみれば, 3歳児健診に訪れている母親の方が1歳6か月児健診に訪れている母親よりも多くみられた(表2)。

2. IWM 尺度の因子分析の結果

IWM 尺度の18項目について因子分析(主成分分析, valimax 回転)を実施した結果, 3因子解による因子が抽出され累積寄与率は58.8%であった。これらの結果は Hazan と Shaver の愛着型の構成概念と一致し, 戸田¹⁴⁾らが作成した IWM 尺度の, 第1因子が安定型, 第2因子が両価型, 第3因子が回避型に相当した。また各質問項目の因子負荷量は全て.45以上を示しており, 因子構造の再現性, すなわち因子的妥当性が確認された(表3)。各因子の Cronbach の α 係数は, 第1因子(安定型)が.90, 第2因子(両価型)は.83, 第3因子(回避型)は.78であり内的整合性についても確保されていた。以上の結果をみた後, IWM 尺度の各下位尺度の得点をした。

3. 不安定な IWM 型と虐待的な養育態度の関連性

不安定な IWM 型をとる人は虐待的な養育関係に陥りやすいという研究仮説を検証する目的で対象者を4つの IWM 型に分類した。これまでの愛着行動の研究から不安定な IWM は両価型・回避型の2つに分類するのが一般的である。また, 一つのタイプが完全に当てはまることは稀で一人の人間の中にはそれぞれの特徴が同時に存在している観点から, 本研究において IWM の安定型・両価型・回避型の3つの下位尺度得点をそれぞれ平均値で3区分し, その性向の低さ, 高さによって, 1. 2. 3型に分けた。各尺度得点の平均より ± 1 標準偏差以内を2型(中間), 平均よりも1標準偏差未満を1型(低い), 平均よりも1標準偏差を超えて高いものを3型(高

表3 IWMの因子分析の結果

項目	1	2	3
因子1: 安定型 ($\alpha=.90$)			
項目2 人と親しくなる方だ	.880	-.034	-.061
項目3 人に好かれやすい	.850	-.152	-.067
項目1 知り合いが得意やすい方だ	.823	.030	-.043
項目6 人ともうまくやっていると自信がある	.805	-.090	.015
項目5 気楽に頼ったり頼られたり出来る	.776	-.077	-.279
項目4 人は私のことを好いてくれている	.756	-.192	-.031
因子2: 両価型 ($\alpha=.83$)			
項目8 友達と一緒にいたくないのではと心配になる	-.022	.761	.187
項目9 自分を信用できないことが良くある	-.130	.747	.136
項目12 すぐに自信をなくしてしまう	-.266	.742	.105
項目10 自分に自信がもてない	-.352	.730	.040
項目7 人はいやいやながら親しくしてくれる	.003	.726	.094
項目11 人からうとまれてしまう	.092	.616	-.105
因子3: 回避型 ($\alpha=.78$)			
項目16 人と親しくなるのは好きではない	-.193	.096	.745
項目17 人は全面的には信用できないと思う	-.165	.154	.722
項目15 望む以上に親しくされるとイライラしてしまう	-.054	.062	.713
項目18 なれなれしい態度をとられると嫌になる	-.056	.179	.696
項目13 人に頼るのは好きではない	-.083	.068	.611
項目14 頼らなくてもうまくやっていると行けると思う	.193	-.111	.598
負荷量二乗和	5.368	2.863	2.360
寄与率 (%)	29.820	45.723	58.835

い)とした。IWMの3因子の中で3型をとる人を両価高群、回避高群とし、安定型だけが1型をとり両価型と回避型で3型をとらない人を安定性が低いということで安定低群とし、それらを著しい偏りのある不安定なIWM型とした。そしてそれ以外の人を安定群とした。同時に両価型と回避型が3型(7人)を示すものはどちらの不安定なIWM型になるか判断し兼ねるため分析から除外した。以後、本研究において不安定なIWM型は、「安定低群, n=34」「両価高群, n=45」「回避高群, n=48」とし、安定したIWM型を「安定群, n=230」と表現する(表4)。また、統計処理を行うにあたり、出現率の期待度数の小さいセルが多くなることにより分析が困難になるため、1歳6か月児健診と3歳児健診の人数を統合して分析を行った。

1) IWM型4群と虐待的な養育態度についての χ^2 検定の結果(表5)

「感情的な八つ当たり」の出現率はIWM型4群

表4 IWMの安定型・両価型・回避型の性向の程度による分類

	1型(低群)	2型(中間群)	3型(高群)
安定型	-1SD	$\pm 1SD$	+1SD
両価型	-1SD	$\pm 1SD$	+1SD
回避型	-1SD	$\pm 1SD$	+1SD
①安定低群(N=34)	安定だけが1型をとり両価と回避で3型をとらない人		
②両価高群(N=45)	両価だけが3型をとる人		
③回避高群(N=48)	回避だけが3型をとる人		
④安定群(N=230)	①②③以外の人		

注:同時に両価と回避が3型の人(7人)は分析から除外した。

において1%水準で有意差が認められた($\chi^2(3)=12.96, P<.01$)。残差分析の結果、両価高群において「感情的な八つ当たり」の出現率が他の群よりも1%水準で多いことが明らかになった。また安定群においてはその出現率が他の群よりも1%水準で少ないことが明らかになった。「暴言を言う」の出現率はIWM型4群において1%水準で有意差が認められた($\chi^2(3)=11.56, P<.01$)。残差分析の結果、両価高群において「暴言を言う」の出現率が他の群よりも1%水準で多いことが、また安定群においてはその出現率が他の群よりも1%水準で少ないことが明らかになった。「たたいてしまいそうで怖い」の出現率はIWM型4群において1%水準で有意差が認められた($\chi^2(3)=14.72, P<.01$)。残差分析の結果、両価高群において「たたいてしまいそうで怖い」の出現率が他の群よりも1%水準で多いことが、また安定群においては他の群よりも出現率が5%水準で少ないことが明らかになった。「何をするかわからない」の出現率のIWM型4群間の分析については、期待度数の小さいセルが多いため有意差については言及できないが、出現率は両価高群では33.3%と安定低群で23.5%、安定群では5.7%であった。他、虐待的な養育態度11項目のうち、有意差が認められなかった項目は「頭をたたく」、「顔を平手打ちする」、「ひどくつねる」、「物を使って、たたく」、「物を投げつける」、「あまり風呂に入れない」、「自動車内に放置する」、であった。

2) IWM型4群と虐待的な養育態度およびサポートとの関連

虐待的な養育態度と育児サポートの関連を検討するため、母親にサポートが「ある」と「ない」の2つのグループに分類して、IWM型4群と虐待的な

表5 IWM型の4群と虐待的な態度についての χ^2 検定の結果

n = 357

		安定低群 n=34	両価高群 n=45	回避高群 n=48	安定群 n=230	合計	
感情的なやつあたり	ない	度数 IWM型%	6 17.6%	2 4.4%	12 25.0%	66 28.7%	86 24.1%
		調整済み残差	-.9	-3.3	.2	2.7**	
	ある	度数 IWM型%	28 82.4%	43 95.6%	36 75.0%	164 71.3%	271 75.9%
		調整済み残差	.9	3.3**	-.2	-2.7	
暴言を言う	ない	度数 IWM型%	15 44.1%	17 37.8%	27 56.3%	143 62.2%	202 56.6%
		調整済み残差	-1.5	-2.7	.0	2.9**	
	ある	度数 IWM型%	19 55.9%	28 62.2%	21 43.8%	87 37.8%	155 43.4%
		調整済み残差	1.5	2.7**	.0	-2.9	
たいそうで怖い	ない	度数 IWM型%	17 50.0%	16 35.6%	31 64.6%	148 64.3%	212 59.4%
		調整済み残差	-1.1	-3.5	.8	2.6*	
	ある	度数 IWM型%	17 50.0%	29 64.4%	17 35.4%	82 35.7%	145 40.6%
		調整済み残差	1.1	3.5**	-.8	-2.6	
何をからさない	ない	度数 IWM型%	26 76.5%	30 66.7%	41 85.4%	217 94.3%	314 88.0%
	ある	度数 IWM型%	8 23.5%	15 33.3%	7 14.6%	13 5.7%	43 12.0%

* $P < .05$ ** $P < .01$

養育態度について比較した。サポートについては、質問紙票の「家事・育児を手伝ってくれる人の存在」に「ある」と答えたものを「サポートがある」とした。虐待的な養育態度の項目とそれぞれのグループ間との関連性を検討するにあたり、各セルの期待度数が小さく分析が困難になると考えられた。そこで、11項目の虐待的な養育態度の各項目の内容の重みはそれぞれ均等ではないと考えられたが、サポートとの関連性をみるための次善策として、その11項目の養育態度に4項目以上で「ある」とされる人を虐待的な養育態度の重複群とし、4項目未満で「ある」とされる人を重複なし群と分類した。虐待的な養育態度11項目中、3項目以上に「ある」と答えた者が186人、4項目以上では119人、5項目以上では70人であったことから、重複は4項目で区切った。

サポートが関連していない場合と関連している場合の虐待的な養育態度の重複とIWM型4群との関連性をみた。まず、IWM型4群と虐待的な養育態

度の重複についての χ^2 検定の結果は、「虐待的な養育態度の重複」の出現率はIWM型4群において1%水準で有意差が認められた($\chi^2(3) = 21.25, P < .01$)。残差分析の結果、両価高群において「虐待的な養育態度の重複」の出現率は他の群よりも1%水準で多く、安定低群では5%水準で多いことが明らかになった。また安定群においてはその出現率は1%水準で他の群より少ないことが明らかになった(表6)。

次に、母親にサポートがあるグループ(n=301)は、IWM型4群において「虐待的な養育態度の重複」が1%水準で有意差があることが認められた($\chi^2(3) = 13.09, P < .01$)。残差分析の結果、両価高群において「虐待的な養育態度の重複」の出現率は他の群よりも1%水準で多いことが明らかになった。安定群では1%水準でその出現率が他の群より少ないことが明らかとなった。また、母親にサポートがないグループ(n=37)間では、IWM型4群

表6 IWM型の4群と虐待的な態度の重複の χ^2 検定の結果

n = 357

			安定低群 n=34	両価高群 n=45	回避高群 n=48	安定群 n=230	合計
虐待的な態度の重複	ない	度数	17	19	33	169	238
		IWM型%	50.0%	42.2%	68.8%	73.5%	66.7%
		調整済み残差	-2.1	-3.7	.3	3.7**	
	ある	度数	17	26	15	61	119
		IWM型%	50.0%	57.8%	31.3%	26.5%	33.3%
		調整済み残差	2.1*	3.7**	-.3	-3.7	

* $P < .05$ ** $P < .01$ 表7 育児サポートがあるグループ・ないグループ間におけるIWM型の4群と「虐待的な養育態度の重複」についての χ^2 検定の結果

IWM型		安定低群 n=32		両価高群 n=44		回避高群 n=46		安定群 n=216		
育児サポート		ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	
虐待的な態度の重複	ない	度数	3	14	0	19	4	27	12	149
		IWM型%	33.3%	60.9%		47.5%	66.7%	67.6%	66.7%	75.3%
		調整済み残差		-.9		-3.2		-.2		3.0**
	ある	度数	6	9	4	21	2	13	6	49
		IWM型%	66.7%	39.1%	100.0%	52.5%	33.3%	32.5%	33.3%	24.7%
		調整済み残差		.9		3.2**		.3		-3.0
合計	度数	9	23	4	40	6	40	18	198	
	IWM型%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

サポートがある n = 301 : サポートがない n = 37

* $P < .05$ ** $P < .01$

において「虐待的な養育態度の重複」の出現率の分析は期待度数の小さいセルが多く認められたため、直接確率法を使用するのが適当と思われた。その結果、IWM型4群間で「虐待的な養育態度の重複」の出現率に差がある傾向が認められた。安定低群はサポートがあるときはその「重複」は、安定低群の39.1%であったが、サポートがないときは66.7%に増加していた。両価高群では、サポートがあるときはその「重複」は両価高群の52.5%であったが、サポートがないときは100%になり、両価高群全てが「重複」のグループにはいった(表7)。この結果から母親にサポートがないとき、両価高群と安定低群では虐待的な養育態度の重複が増加する傾向にあることが示唆された。

IV 考 察

本研究は母親のIWMと虐待的な養育態度およびサポートとの関連性を明らかにすることを目的として、1歳6か月児健診と3歳児健診に訪れた母親を研究対象者として質問紙調査を行った。

J. Bolwbyの愛着理論を基に研究が進み、日本の研究においても養育態度の良きも悪きも、それはIWMを介して次の世代へ伝達されることが少しずつ明らかになってきた^{15~18)}。

今回の調査では全体の母親の75.8%に「感情的な八つ当たり」、55.5%に「頭をたたく」、43.7%に「傷つける暴言をいう」などの養育態度が見られた。この割合は徳永ら¹⁹⁾が一般の母親を対象に虐待的な養育態度の聞き取り調査結果と類似していた。

虐待的な養育態度がIWMの型によって差がないかを分析したところ、両価高群は他の群と比較して「感情的な八つ当たり」、「暴言を言う」、「たたいてしまいそうで怖い」の項目で有意に多いこと認められた。この結果から、養育歴を反映するIWMの両価型高群と虐待的な養育態度には関連性があると考えられる。虐待は身体的な暴力をイメージしやすいが、言葉の暴力は心理的なダメージを与える。心理的虐待は子どもの自尊感情を欠落させ、自立的な行動を不可能にし、相手に敵意を抱きやすくなるといわれている²⁰⁾。両価型の特性は自信に欠け、自分は

人から正当に評価されていないと思うところが強いとされ、本研究のIWM尺度の因子分析では、「自分を信用出来ないことがよくある」、「すぐに自信をなくす」、「人から疎まれてしまう」という項目に負荷量が大きかった。松本²¹⁾らは、IWM尺度を使ってストレスに関する研究を行い、両価特性の高い人は他のIWM型と比較してストレスのショックが一番大きく認知的混乱、抑うつなどの動揺がみられると報告している。安定低群は、虐待的な養育態度11項について他のIWM型群と比較してどの項目についても有意差はなかったが、虐待的な養育態度の重複において他の群よりも多いことが明らかになった。回避高群は虐待的な養育態度11項について他のIWM型群と比較してどの項目についても有意差はなくまた、その重複においても有意差はなかった。回避特性の高い人は、他者は拒否的で援助が期待できなと感じることから自己充足的な性傾向があるとされる。本研究のIWM尺度の因子分析の結果では「人と親しくなるのは好きではない」、「人は全面的に信用出来ないと思う」という項目に負荷量が大きかった。戸田²²⁾は、両価特性の高い親は不適切で中途半端であるけれども、回避特性の高い親ほど子どもを拒否し、無視することはないと報告している。また、本研究においてIWMは一人の人間の中にはそれぞれの特徴が同時に存在しており、IWMの性向の偏りにより愛着行動も異なる⁶⁾という観点から、IWMの安定型・両価型・回避型を、性向の低さ、高さによって不安定なIWM型を3群(安定低群・両価高群・回避高群)に分け、それ以外を安定群として4群に分類した。本研究において回避高群がいずれの虐待的な養育態度の項目に有意差はなかったが、IWMの型によって愛着行動に違いがあるという観点から考えると、質問項目に回避型の特徴を反映するものがなかったのではないかと推測する。今後、回避高群への質問項目の検討が必要であると考えられた。

安定群は他のIWM型群よりも、「感情的な八つ当たり」、「暴言を言う」、「たたいてしまいそうで怖い」が少ないことが明らかになった。虐待的な養育態度の重複に関しても他のIWM型群よりも少ないことが明らかになった。この結果は安定群は虐待的な養育態度と関連性が少ないことを反映するものだった。

以上のことから、本研究の不安定なIWMをもつ母親は、虐待的な養育態度に陥りやすいという研究仮説は、「両価高群の母親」について検証できた。また、「安定低群の母親」についても、虐待的な養育態度の重複が他の群よりも有意に高いという結果

からも仮説を検証することができたと考えられる。

現在石川県内では、虐待防止の一環として、各医療機関で分娩して退院する前に産後うつ尺度を用いて支援の必要な母親をスクリーニングしている。うつ得点の高い母親に対しては管轄地域の保健センターと連携し家庭訪問等の支援活動を行っている。しかし、本研究結果から育児支援を必要としている母親を把握するには、不安定なIWMをもつ母親も配慮する必要があるのではないかと考えられた。また、母親にサポートがあるグループとないグループそれぞれにおいて4つのIWM型群間で比較した結果、サポートがあっても両価高群は他のIWM型群より虐待的な養育態度の重複が多くみられ、サポートがないと全ての母親が重複するグループにはいった。安定低群では、サポートがある母親は、「虐待的な養育態度の重複」の割合は少なかった。しかし、サポートがない母親はその割合は約2倍に増加していた。これらの結果から、サポートの有無が虐待的な養育態度を緩和する関連要因であることが推測される。育児サポートを考える時、母親のIWM型特性を考慮した支援は効果を上げる要素になると考えられる。また、IWMは母子相互作用の質の影響を受けて生後2,3歳までに形成されるならば、妊娠中から両親への支援が必要である。そのような早期支援が虐待を未然に防ぎ、またそのことが虐待の世代間伝達の防止に繋がる。

現在、著者は心理教育プログラムを取り入れた妊娠中の両親学級を編成し実験的に実施している。これは特に虐待リスクのある妊婦を対象としているのではなくポピュレーションアプローチ的な介入である。妊娠中の両親学級は、多くの分娩施設のある医療機関及び地域の保健センターで開催されているが、生まれてくる子どもに安定したIWMが形成できるような養育環境を整えるという視点で学級を編成することは子育て支援の今後の課題ではないかと思われる。

本研究の限界として、虐待的な養育態度の回答は、4件法で行ったが「時々ある」、「よくある」という回答が少なかったため回収された回答を「はい」、「いいえ」の2段階に分類し直したことや、虐待的な要因と考えられる母親の持つ子どもの数の統制はしなかった。また、また双子の母親も分析の数の中に含まれていることや1歳6か月児健診と3歳児健診に訪れた母親の人数を合算したため研究結果に影響を及ぼしていることが予測される。また、サポートとの関連を検討するとき、虐待的な養育態度が4項目以上ある人を重複群とし、そして、そうでない群とで比較した。11項目の虐待的な養育態度の重み

はそれぞれ均等ではないことが考えられるため、今後その行為が子どもに及ぼす影響の程度を把握する必要がありと考えられる。

本研究の実施に際し、ご協力頂いたお母様方、ならびに石川県立看護大学の金川克子・武山雅志（研究指導教官）の各氏に厚くお礼申し上げます。

（受付 2007. 9.14）
（採用 2008.12.25）

文 献

- 1) 森田展彰. 虐待に関わる要因と親に対する介入治療. 中谷謹子, 編. 児童虐待と現代の家族. 東京: 信山社出版, 2003; 228-280.
- 2) Allen JP, Hauser ST, Borman-Spurrell E. Attachment theory as a framework for understanding sequelae of severe adolescent psychopathology: an 11-year follow-up study. *Journal of Consulting & Clinical Psychology* 1996; 64: 254-263.
- 3) Pears KC, Capaldi MD. Intergenerational transmission of abuse: a two-generational prospective study of an at-risk sample. *Child Abuse & Neglect* 2001; 25: 1439-1461.
- 4) Romito P, Crima M, Saurel-Cubizolles MJ. Adult outcome in women who experienced parental violence during childhood. *Child Abuse & Neglect* 2003; 27: 1127-1144.
- 5) Zeanah CH, Scheeringa M, Boris NW, et al. Reactive attachment disorder in maltreated toddlers. *Child Abuse & Neglect* 2004; 28: 877-888.
- 6) J. ホームズ. ボウルビィとアタッチメント理論 [John Bowlby & Attachment Theory] (黒田実朗, 訳) 東京: 岩崎学術出版, 1996.
- 7) 久保田まり. アタッチメントの研究: 内的ワーキングモデルの形成と発達. 東京: 川島書店, 1995; 132-156.
- 8) Main M, Kaplan N, Cassidy J. Security in infancy, childhood and adulthood: a move to the level of representation. *Child Development* 1985; 50: 1-2.
- 9) Kaufman J, Zigler E. Do abused children become abusive children? *Am J Orthopsychiatry* 1987; 57: 186-192.
- 10) Hazan C, Shaver P. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology* 1987; 52: 511-524.
- 11) 詫摩武俊, 戸田弘二. 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報 1988; 1-16.
- 12) 内山絢子. 一般家庭調査: 母親が行う虐待行為の実態. 萩原玉味, 岩井宣子, 編. 児童虐待とその対策. 東京: 多賀出版, 1989; 62-83.
- 13) 高窪美智子, 西村真実子, 津田朗子, 他. 育児における暴力・暴言の実態と背景要因の関係. 石川看護雑誌 2005; 3: 11-20.
- 14) 戸田弘二. 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (Working Model) からの検討. 日本心理学会第52回大会発表論文集 1988: 27.
- 15) 大西美代子. 成人愛着研究における発達臨床的意義. 思春期青年期精神医学 2000; 10: 97-114.
- 16) 大西美代子, 長沼佐代子, 生田憲正. 身体的虐待と思春期の精神病理. 精神科治療学 2003; 18: 1189-1196.
- 17) 植木野裕美, 鎌田佳奈美, 鈴木敦子, 他. 子ども虐待の予防に向けた育児支援(1): 妊娠各期における妊婦の Internal Working Model と親になることに対する態度の関連. 日本小児看護学会誌 2002; 11: 51-57.
- 18) 木村典子, 山磨康子, 松原まなみ. 周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児及び乳児への愛着. 日本看護科学会誌 2001; 21: 71-79.
- 19) 徳永雅子, 大原美和子, 萱間真美, 他. 首都圏一般人口における児童虐待の調査. 厚生指標 2000; 47: 3-10.
- 20) 渡辺久子. 母子臨床と世代間伝達. 東京: 金剛出版, 2000; 11-92.
- 21) 松本忠久. 男子大学生における対人内部作業モデルとストレス. 秋田経済法科大学部紀要 1998; 15: 41-47.
- 22) 戸田弘二. 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連. 北海道教育大学紀要 1990; 41: 91-100.

The relationship between a mother's internal working model and her tendency to be abusive in her child-raising approach

Akimi URAYAMA* and Mamiko Nishimura^{2*}

Key words : Support, Internal working model, Tendency toward child abuse

Objective The internal working model (IWM) is an outcome of the individual's pattern of development during their childhood and determines attachment styles. Probably the most significant factor that leads to child-abuse is an unstable type of attachment of mothers towards their children. Therefore, the objective of this study was to determine the relationship between a mother's IWM, her tendency to be abusive in her child raising approach and the implications for support to prevent such abuse.

Methods Use of a self-administered questionnaire for mothers (n=534) who visited health centers in Ishikawa prefecture for a routine child development check-up.

Results The results showed that mothers with a strongly ambivalent IWM showed an increased tendency towards child abuse when compared with mothers with other types of IWM. Even when these ambivalent IWM mothers were supported, their abusive tendencies did not change. Another aspect that emerged from the study was that mothers with a low tendency for a stable IWM showed more abusive actions towards their child when compared with mothers with other types of IWM. However, these mothers, with support, responded with a reduction in their abusive actions.

Conclusion It can therefore be concluded that there is a demonstrable relationship between a mother's IWM and an abusive child-raising approach. It also showed that with mothers having a low tendency for a stable IWM, provision of support can reduce and even prevent child-abuse.

* Department of Community Health Nursing, Division of Health Sciences and Nursing Graduate of Ishikawa Prefectural Nursing University

^{2*} Ishikawa Prefectural Nursing University